慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	木下和夫編 財政政策入門
Sub Title	
Author	古田, 精司
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.8 (1965. 8) ,p.789(97)-
JaLC DOI	10.14991/001.19650801-0087
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650801-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

（注1） この報告書に先立つ次の報告書も注目に値する。日本経済調査協議会『低開発国経済と日本』――特に東南アジアを中心として――調査報告六三―六、昭和三八年九月。

（注2） 同じ方向をめざしたものとして、次の著作は重要である。*New Directions for World Trade – A Chatham House Report*, London 1964.（拙稿紹介『世界経済評論』一九六五年七月号）

（注3） 外務省編著『国連貿易開発会議の研究』――南北問題の新展開――、世界経済研究協会、昭和四〇年、もまた参照に値する。

（注4） この点に関しては、注2に掲げた文献における Caroline Miles, "The Market for Manufactures of Underdeveloped Countries" が興味ある分析を展開している。

（日本経済調査協議会・調査報告六五ノ一・A5・五四三頁）

（注5） D. C. North "Location Theory and Regional Economic Growth," *Journal of Political Economy*, June 1955.

（注6） UN, *Towards a New Trade Policy for Development*, New York 1964.（外務省訳『プレビッシュ報告』――新しい貿易政策を求めて――国際日本協会、昭和三九年。

（注7） かかる分析を行なったものとしては、以下のものが挙げられよう。R. F. Harrod (ed. by) *International Trade Theory in Developing World*, London 1963.（拙稿書評『三田学会雑誌』一九六四年十月号）

新刊紹介

木下和夫編『財政政策入門』

マスグレイヴの「財政理論」がでたとき、「こんな本が、ぼくの大学院時代にでていたならば……」と嘆声をあげて私は迎えいれたことがある。「財政政策入門」を手にしたときも、「大学時代にこんな本がほしかったのに……」と思わず溜息をついたものである。当時はケインズ革命の熱病が財政学にも感染し、突如として猛威をふるいはじめたフィスカル・ポリシーの理論も、財政理論で占めるべき座席が空中にういていた時代であった。

かれこれ思いかえしながらこの本を一読してみた。ほとんどの章は新幹線でつっぱしるようによめたが、ある章では徐行また徐行というところもあった。軽快なスピードでよめた章は、大体のところマスグレイヴの「財政理論」の解説ないしは要約であると気がついた。その意味では、この本は「財政理論」を勉強するさいのサブノートにつかうこともできるわけである。タイトルはごらんのとおり「入門」となっているけれど、ただの入門書だと思いこんで気をゆるめてよんだら少々手ごわいかもしれない。土俵がかなりひろいから、各章の末尾にあげてある参考文献（この文献の選び方はきわめて適切）を手がかりに、積極的にこれからの勉強の橋頭堡にしようという心がまえが必要であろう。

徐行したところは、「V・経済の成長」である。なかでも、ほとんどストップして前へすすめなかったのは、マスグレイヴ型の均衡成長政策が、短期的かつ政策的であり流通面の分析に重点がおかれ、他方、ハロッド＝ドーマー型の成長理論では、長期的かつ計画目標的であって生産面の分析に重点がおかれ、両者は問題を扱う角度がくい違い、結びつきがたい（一六四～五頁）という指摘である。一般にはむしろ、ハロッド＝ドーマー型の成長理論を基礎として、マスグレイヴ型の均衡成長政策がなりたっているのだから、結びつかなかったならばかえって困るというべきであろう。数式の展開にしても、一六三頁の三行目は、$R_v = \alpha[Z + C(1-Z) - g(1-v)]$ となるべきだから、七行目も、$\frac{\partial R_v}{\partial Z} = +\alpha(1-c)$ となるはずである。この章はマスグレイヴよりも前進しようという意欲があらわれているだけに、かえってスリップしたのであろう。野球でいえば措しむべきオーバー・ランである。

けれども各章の執筆者の顔ぶれをみればわかるとおり、財政政策のそれぞれの分野で声価を確立した最適任者が選ばれているため、読者は安心してついていくことができる。だが一定の距離をおくことが、財政政策の理論をマスターする近道であろう。大学三・四年生に薦めたい。

執筆分担はつぎのとおりである。〈I〉財政政策とはなにか（木下和夫）・〈II〉資源の配分（水野正一）・〈III〉所得の分配（大熊一郎）・〈IV〉経済の安定（宇田川璋仁）・〈V〉経済の成長（前田新太郎）・〈VI〉日本の財政政策（肥後和夫）

（有斐閣双書・一九六五年五月刊・B6・二一四頁・三四〇円）

―古田精司―

＊　＊　＊